



本物の話を子どもに聞かせたい

生重幸恵さん NPO法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長

プロフィール：1956年北海道生まれ。杉並区本天沼在住。

東京都杉並区学校教育コーディネーター。

東京都生涯学習審議会委員、東京都子ども居場所づくりコーディネータをつとめる。

「総合的な学習の時間」及び学校週5日制にともなう事業のスムーズな実施のために、公立小・中学校に協力者をコーディネートする。教育、地域活動の充実をはかる人材育成を目指す。

■「総合学習の時間」の黒子として



▲体験型授業「総合学習」活動の様子

学校に縁のない人でも「総合学習の時間」という言葉は聞いたことがあるだろう。平成14年度から全国の小中学校に導入された、体験型授業のことである。

ゲストティーチャーによる授業もそのひとつ。たとえば、さまざまな分野で活躍するプロフェッショナルを招いて、得意とするテーマで授業をしてもらい、あるいは生徒たちとディスカッションする。そこで、子どもたちは教科とはちがう刺激と学びを体験する。

今回ご紹介するのは、杉並区の学校教育コーディネーター・生重幸恵さん。ひとことでいえば、「総合学習の時間」の縁の下で力持ちである。どんなテーマで、どんなゲストを呼び、どんな授業にするか。その企画、構成、ゲストの人選などを現場の教師とともに考え、具体的に支えてゆく仕事である。

「職場体験」の手伝いも学校教育コーディネーターの仕事である。生徒が一定期間、いろいろな職場を体験する。そこで働く大人たちとふれあうことで、社会人としての自覚を育て、働くことの意味を考える、貴重な体験学習である。

平成14年に杉並区では、東京都初の学校教育コーディネーターを配置。生重さんはその第一号である。平成18年4月現在、区

には15人のコーディネーターがおり、それぞれが複数の学校を受け持つ。生重さんの担当は小中あわせて6校ある。

「依頼が来て、まずすることは、担当の先生の話をよく聞くことです。こんなことをしたい、こんな人に来てもらいたい、その思いを具体化するための企画を考え、ゲストを探す。先生もゲストになる人も忙しいし、学校と企業などでは動いている時間にズレがあるので、交渉する時間が取りにくい。そこで、私たちが橋渡し役になって双方の話を聞き、内容を固めていくのです」

そうはいっても、教師とゲストが直接交渉したほうが話が早いようにも思える。実際、そうする教師もいる。コーディネーター制度を利用するかどうかは、現場の学校や教師の考え方次第だ。それでも、この制度を利用する学校は着実に増えており、コーディネーターの数も4年前のスタート時に4人だったのが、先述のように増えている。小平市、世田谷区でも同様の制度を導入している。学校のことをすべて教師にまかせるのではなく、必要な部分は専門家にまかせたほうが、生徒にも教師にもメリットがあることが認められてきているのだ。

生重さんは、コーディネーターはあくまで黒子だと言う。カリキュラムの主役は生徒であり、ゲストティーチャーである。教師はいわば監督だ。ゲストの話に感動する生徒はいても、教室の隅で見守るコーディネーターのそこに至るまでの働きに気づくことはない。あくまで裏方なのだ。とはいえ、裏方が手を抜いては、監督も主役も十分な力を発揮できない。もうひとつ言えば、その報酬は1校当たり9000円。生徒たちへの愛情とボランティア精神がなければ成り立たない。

■中学校に保護者の足を向けさせる

生重さんには、現在、大学4年生の長女、2年生の長男、1年生の次男がいる。長女が区立若杉小学校に通っているときにPTA役員から副会長になったのが、生重さんと学校との絆のはじまりだった。フリーランスで市場調査の仕事を続けながら、その後、区立天沼中学のPTA会長を4年間つとめている。

「子どもが中学生になると、共働きの家庭も多くなり、保護者は学校に来なくなる。いつも親が顔を出している学校はいい学校なんです。自分の子どもに問題がなければ、それでいいというのではなく、また、何かあったらすぐに学校に注文をつけるのでもなく(笑)、外の風を入れるためにも、保護者はどんどん学校に行くべきなんです」

生重さんがPTA会長になってはじめてことは、校長室へ週に一度通うこと。学校のため、になにか手伝えることはないかと伝えるために。

「学校に対して偏った見方をしがちな保護者もいれば、学校側も外の人間に対して構えている部分もあると思います。お互いに理解しあうには、クレームをつける前に、まず協力したいという気持ちを伝える。そこから信頼関係が生まれてゆくのではないのでしょうか」

他にも「親としての高校受験」などのセミナーを企画。保護者の目と足を学校に向けるきっかけを作ってゆく。やがて、PTA会長から学校教育コーディネーターへ。子どもの通う学校だけでなく、地域の小学校、中学校へと活動の場を広げることになる。

／

■前向きに学校と関わってほしい



▲さまざまな体験を通して本物を子どもたちは学んでゆく

「本物にまसारものはない」というのが、生重さんの持論。福祉をテーマにした授業で、介護会社の経営者をゲストティーチャーに招いたとき、落ち着かない、人の話を聞けないと言われていた生徒たちが、だんだん話に引き込まれていくのが手に取るようにわかる。介護していたお年寄りが、不慮の事故で亡くなって悲しかったという話に至るころには、教室がシーンとなる。

「学校にハマっていった」という生重さんの原動力は、この手応えにあるのだろう。

平成13年。公務員のご主人を病気で亡くす。三人の子どもは高校生と中学生だった。一家の大黒柱となった生重さんが選んだ道は、仕事を辞めること。

「再出発するなら、お金よりも、好きなこと、楽しいことを優先したいと思ったんです」

そして、学校教育に協力する人材育成事業を柱としたNPO法人「スクール・アドバイス・ネットワーク」を立ち上げ、三年後には軌道に乗せる。成功する人には、前向きな発想と、それを実現させるだけの実行力があるものだ。そんな生重さんをお子さんたちはどう見ているのだろう。

「学校にはハマったけれど、子育てのほうはほったらかしでした(笑)。うちの子どもはみんな料理が好きで、昔からよく一緒に作ったものです。手伝ってくれるたびにほめていたら、今では私より上手になりました(笑)」

生重さんの持論がもうひとつある。

「批判されて成長していく者はいない。それは子どもも先生も、親も同じ。誰だってほめられたいし、認められたいんです」

毎年、進入学、進級の季節になると、学校ではPTA役員の座をめぐって、母親たちの「ゆずり合い」が繰り広げられる。名乗り出る母親がいない場合は、くじ引きになることもあ

る。生重さん曰く、「言い訳が苦手」なおかげで、十年前に思いがけず引き受けてしまったPTA役員。それがすべての出発点だったのだ。

「小学校のPTAは、1年生から6年生までの幅広いお母さんと友だちになれるんです。そんなチャンスはほかにはないですよ。下駄箱の前で愚痴を言ってないで(笑)、前向きに学校に関わってみましょうよ」

考えてみれば、学校関係者でいちばん人数の多いのは、親たちなのである。ひとりでも多くの保護者が、学校に関心を持てば、学校はもっとよくなっていくはずだ。子どもたちが抱えるいろいろな問題も、親と学校の絆が深まることで、解決の糸口がみつかるのではないか。生重さんの話を聞くうちに、そんなふう

に思えてきた。